

岩倉使節団派遣中の留守政府の主要人物列伝

番号	氏名 (ふりがな)	出身	生没年	使節出発時の役職
1	三条実美 (さんじょう さねとみ)	公家	1837 - 1891	太政大臣
2	西郷隆盛 (さいごう たかもり)	鹿児島	1828 - 1877	参議
3	大隈重信 (おおくま しげのぶ)	佐賀	1838 - 1922	参議
4	板垣退助 (いたがき たいすけ)	高知	1837 - 1919	参議
5	後藤象二郎 (ごとう しょうじろう)	高知	1838 - 1897	左院議長
6	江藤新平 (えとう しんぺい)	佐賀	1834 - 1874	左院副議長
7	副島種臣 (そえじま たねおみ)	佐賀	1828 - 1905	外務卿
8	大木喬任 (おおき たかとう)	佐賀	1832 - 1899	文部卿
9	井上 馨 (いのうえ かおる)	山口	1836 - 1915	大蔵大輔
10	山県有朋 (やまがた ありとも)	山口	1838 - 1922	兵部大輔
11	山尾庸三 (やまお ようぞう)	山口	1837 - 1917	工部少輔
12	渋沢栄一 (しぶさわ えいいち)	幕臣	1840 - 1931	大蔵大丞
13	黒田清隆 (くろだ きよたか)	鹿児島	1840 - 1900	開拓使次官
14	榎本武揚 (えのもと たけあき)	幕臣	1836 - 1908	入獄中
15	フルベッキ (Guido Verbeck)	米国	1830 - 1898	大学南校教頭



長崎の佐賀藩『致遠館』の生徒たち(フルベッキ写真)

1 三条実美（さんじょう さねとみ）公家 1837 - 1891 太政大臣



幕末の長州・五卿落ちから、太政大臣に上りつめた公爵。

太政大臣・三条実美は岩倉使節団一行を送別する宴で、次のように激励した。

「外国の交際は国の安危に関し、使命の能否は国の榮辱に係る。今や大政維新、海外各国と並立をはかるにあたり、使命を絶域万里に奉ず。外交内治前途の大業その成否実はこの擧にあり、あに大任にあらずや。大使天然の英資を抱き中興の元勳たり。所属諸卿皆国家の柱石、しかして所率の官員またこれ一時の俊秀、各金欽旨を奉じ、同心協力以てその職を尽くす、われその必ず奏功の遠からざるを知る。行けや、海に火輪を転じ、陸に汽車を輾（にじ）らせ、万里馳駆、英名を四方に宣揚し、恙なき帰朝を祈る」と使節団を送る目的とその壮行を鼓舞している。蓋し名文であろう。

天保8年（1837）議奏を務める三条実万の三男として生まれる。幼名：福麿。

安政元年（1854）次兄：三条公睦の早世により家督を継ぐ。安政の大獄で父は処分されるが、実美も尊攘派公家として、文久2年に勅使の一人として江戸に出て、14代將軍徳川家茂に尊攘を督促し、国事御用掛となる。長州藩と密接な関係を持ち、姉小路公知と共に尊攘激派の公卿として幕府に攘夷決行を求め、孝明天皇の大和行幸を企画する。

文久3年、中川宮ら公武合体派の皇族・公卿と薩摩・会津両藩らによる八月十八日の長州へ逃れる（七卿落ち）。一旦長州藩に匿われるも、元治元年の第一次長州征伐に際し、福岡藩預けとなり、大宰府に移送され、そこで3年間の幽閉生活を送る。この間に、薩摩藩の西郷隆盛や長州藩の高杉晋作らと交流を持った。従って、慶応3年の王政復古により表舞台に戻り、新政府の議定に付き、翌年には副総裁となる。戊辰戦争では関東觀察使として江戸に赴き、明治2年、右大臣。同4年には太政大臣となる。

岩倉使節団米欧回覧の出発に際しては激励文を奏し、留守政府では名目上は首班格的存在となる。外遊組帰国直後の明治6年には、征韓論をめぐり留守政府組と反対する外遊組の板挟みになり、その温和な性格から苦悶の末、病気となり、一時岩倉具視が代理となって、奇策をもって征韓論を拒否した為、明治6年の政変となり、西郷隆盛、江藤新平、副島正臣、後藤象二郎、板垣退助ら留守組主要人脈の辞職を招くことになる。

明治15年、大勲位菊花大綬章を受章。明治18年には、太政官制廃止し、内閣制度の発足に伴い伊藤博文が内閣総理大臣となり、実美は内大臣に転じる。天皇の側近として、常侍輔弼の名誉職でもあった。それを承知しながら、「国家将来のためであり、私自身はどうでもよい」と性格の淡白さを示している。（1015・12・15）

2 西郷隆盛（さいごう たかもり） 1828 - 1877 鹿児島 参議



明治維新三傑 敬天愛人の大仁者 武士社会消滅に殉じる。

薩摩藩下級武士（禄47石）の西郷吉兵衛隆盛の長男として鹿児島に生れる。名：隆永。のち武雄，隆盛と改める。幼名：小吉。通称：吉之介。喜兵衛。吉兵衛。吉之助。号：南洲。三弟：西郷従道。二弟と四弟は戊辰戦争と西南戦争で戦死。大山巖は従弟。

加治屋町の郷中・二才頭として頭角を顕し、大久保利通、税所篤、吉井友実、伊地知正治、海江田信義ら後の精忠組の同志と「近思録」輪読会で力を養う。やがて藩主：島津斉彬に認められ、御庭番役として江戸に赴き、一橋慶喜公擁立に働く。藤田東湖、徳川斉昭、橋本左内、武田耕雲斎らと交わる。斉彬の急死の後、幕府の目を避けて奄美大島へ逃れる。3年後帰藩するが、国父・島津久光に疎まれて、沖永良部島へ流島。その間、農民の生活に接し、彼らに教育も授ける。家老・小松帯刀や大久保利通の取り成しで復帰すると、元治元年（1864）禁門の変以降の幕府と朝廷の駆け引きの尊皇攘夷の政争の中に積極的に関与していく。最初は、京都守護役の会津藩と佐幕的行動をとり、第一次征長戦争では、討伐軍の参謀として、長州敗戦後の長州処分の斡旋役も務めるが、勝海舟や坂本龍馬らの王政復古による新しい日本の建設という思想に共鳴して、大久保利通と共に次第に倒幕の方向に舵を切る。第二次征長戦争では、薩長同盟、薩土同盟の締結に主導的役割を演じる。鳥羽伏見の戦いで、徳川慶喜が江戸に逃げ帰ると、一気呵成に錦の御旗を掲げて、東海道の東征大提督府下参謀として、山岡鉄舟や勝海舟との談判に応じ、江戸城無血開城への道を開く。更に東北に遠征し、戊辰戦争を勝利に導く。

明治維新後は、一旦薩摩に帰るが、大久保利通や岩倉具視の要請で、明治4年上京して、新政府の参議に就任、薩長の軍事力を背景に廃藩置県を強行する。明治4年11月の岩倉使節団の欧米派遣に際しては、留守政府の要として、三条実美をトップとする、いわば西郷政権を形成する。然し、朝鮮との国交回復問題に端を発する征韓論に於いて、岩倉使節団の外遊組と留守政府の主要参議との意見の対立に基づく明治六年の政変に敗れて、江藤新平、副島種臣、板垣退助、後藤新平らと共に下野することになる。

西郷は鹿児島に戻って、私学校の教育などに専念していたが、明治10年、私学校の生徒の暴発による西南戦争に巻き込まれて、やむを得ずその先頭に立たされて、城山での自刃に追い込まれる。武士階級の消滅を狙う新政府の革命成就のために、武士の滅びに殉じたともいえる最後であった。死後、十数年して名誉回復して正三位に任じられ、継嗣・寅太郎は侯爵を賜る。その人生は、『敬天愛人』の精神の「天性の大仁者」（斉彬）であった。（2015・12・27 『西郷隆盛』—小野寺満憲、他）。

3 大隈重信（おおくま しげのぶ） 1838 - 1922 佐賀 参議



岩倉使節団留守政府を仕切る のち総理大臣2回、外相5回

佐賀藩士・知行400石砲術家・大隈信保、三井子の長男として生まれる。幼名：龍造寺八幡宮に因む「八太郎」。13歳で父親に死別、賢母の下で育つ。7歳で藩校：弘道館で漢学、儒学を学ぶが、反発して蘭学寮に転じる。枝吉神陽の義祭同盟に参加する。24歳、蘭学寮と弘道館を合併させて、弘道館で蘭学を教え、藩主にオランダ憲法を進講する。長崎の藩英学校「致遠館」（フルベッキ校長）で、教頭格で藩士を教育。フルベッキから英語、新約聖書、アメリカ独立宣言など学ぶ一方、藩の代品方として、藩の特産品の取引に携わる。明治元年、キリスト教徒弾圧事件で、英公使パークスの抗議に窮した新政府は、大隈を外国事務局判事に起用、そつなくパークスを論破した一件から、一躍新政府の信頼を得る。明治2年、会計官副知事を兼任、新貨条例など金融行政にも参画する。上京の折、先妻・美登と離婚、小栗忠順の従妹・三枝綾子と再婚。自宅で伊藤博文、井上馨ら若手を食客として、築地梁山泊と称される政治談議にふけた。

同年7月、大蔵大輔兼民部大輔を兼務、最重要役職を務める。明治3年副島種臣に代り参議となる。岩倉使節団を企画するが、自らは留守政府に残り、鬼の居ぬうちの洗濯とばかりに諸施策を率先して遂行する。明治6年5月大蔵省事務総裁。同10月参議兼大蔵卿として、帰国後の大久保利通の右腕となり、萩の乱、佐賀の乱、西南戦争や台湾出兵などの財政を切り盛りする。明治11年に大久保利通が暗殺されると、次第に紙幣増発の大隈財政に対する松方正義の批判や、伊藤博文などの台頭もあって、憲法や国会開設をめぐる思惑の違いによる明治14年の政変によって下野を余儀なくされる。

下野後の、明治15年、小野梓、尾崎行雄、犬養毅、矢野文雄らと立憲改進黨を結成、総裁に推される。また、高田早苗らと「学問の独立・自由」を唱えて、東京専門学校（現・早稲田大学）を創設し、初代総長となる。

明治31年、板垣退助と「隈板内閣」を組閣するなど、内閣総理大臣（第8代、第17代）、不平等条約改正を狙うための外務大臣を5回（第3、4、10、13、28代）、第11代農商務大臣、第30代と33代内務大臣、貴族院議員などを勤めるなど政治から最後まで離れられなかった。悪筆を苦にして、生涯、自筆を残さなかったと言われる。本人は、演説は好きでないと言うが、一度話し始めると滔々と言葉が溢れて止まらなかったと言う。先妻・美登の間の娘・熊子は結婚したが子をなさず、後妻の綾子にも子がなかったため、実の系統は絶えた。（2015・12・30 『大隈重信と佐賀藩』）

4 板垣退助（いたがき たいすけ） 1837 - 1919 高知 参議



自由民権運動家 清貧で無欲恬淡 五十銭・百円紙幣の肖像になる

土佐藩上士：乾正成の長男として高知に生れる。乾家は、武田信玄の重臣、板垣信方を始祖とす。幼名：猪之助。諱：正躬。正形。号：無形。後藤象二郎とは竹馬の友。

若山勿堂（佐藤一斎の門下生）に学問的影響を受ける。文久元年、江戸留守居役兼軍備御用役で江戸に出て、小笠原唯八、佐々木高行らと会い、勤皇を誓い、山内容堂の御前で尊皇攘夷を唱える。文久3年、高輪・薩摩藩邸で大久保一蔵に会う。容堂と上京の船が漂着した下田で、勝海舟と藩主を合わせて、坂本龍馬の脱藩恩赦を工作する。慶應元年、江戸に出てオランダ式騎兵術を学ぶ。薩摩藩士(吉井友実)や水戸藩士（相楽総三）らと交流、京都で土佐藩・谷千城や薩摩藩・西郷吉之助らと薩土密約を結び、容堂にも武力倒幕を説く。維新後、戊辰戦争では土佐勤皇党の藩兵らを率いて、東山道先鋒総督府の参謀として従軍する。この時、甲斐源氏の流れをくむ先祖・板垣氏に改姓して、甲州勝沼の戦いで、新撰組(近藤勇)を破る。東北戦争にも、参戦して三春藩の無血開城や二本松藩、仙台藩、会津藩などと交戦して軍功を挙げるが、戦後は、彼らの名誉回復に努めた。明治2年、木戸、西郷、大隈らと参与に就任。明治3年、高知藩の大参事となって、『人民平均の理』を発令する。明治4年、参議となって、岩倉使節団を送り出す。留守中は、毎日、西郷と軍談に耽っていたとも言われる。使節団帰国後の、明治6年の政変では、征韓論を主導していた板垣は西郷と共に下野して、翌年、愛国公党を結成して、後藤象二郎と共に左院に民選議院設立建白書を提出するが却下される。高知に戻って立志社を設立。明治8年には、一旦参議に復帰して、大阪会議に参加するが、まもなく辞任して、自由民権運動に専念する。明治14年の国会開設の詔を機会に、自由党を結成し、党首となる。この後、全国遊説中、岐阜で暴漢に襲われて負傷した折、『吾死ストモ自由ハ死セン』と発する。この治療にあたったのが、当時医師の後藤新平だった。また、暴漢はのちに板垣自らが助命している。華族制度制定後、二度、授爵の命を受けたが断っている。三度目に、不敬と言われて、伯爵を授爵するが、のちに、華族世襲制度廃止運動を行っている。生涯、清貧と無欲恬淡を貫いたようだ。華族には衆議院被選挙権がなく、貴族院勅選も拒否したので帝国議会に議席を持つことはなかった。明治23年、帝国議会開設後、立憲自由党を再興。自由党と改称し党総理となる。明治29年、伊藤内閣の内務大臣に入閣。明治31年、大隈（進歩党）と合同して、憲政党を組織、日本最初の政党内閣（隈板内閣）を結成するが、内紛で、4か月で瓦解した。明治33年、立憲憲政会創立を最後に、政界を引退した。引退後は、機関紙『友愛』を創刊。従一位勲一等伯爵。五十銭と百円紙幣の肖像となった。（2016・1・6）

5 後藤象二郎（ごとう しょうじろう）1838 - 1897 高知 左院議長



土佐3伯の一人 大政奉還建白で徳川慶喜を動かす

土佐藩士・後藤正晴(馬回格150石)の長男として高知に生れる。幼名：保弥太。良輔。通称：象二郎。諱：正本。元暉。字：日暉。雲濤。不倒翁。号：光海。鷗公。など
早くに父を失い、義理の叔父・吉田東洋に育てられ、東洋の小林塾で、乾退助、福岡孝悌、岩崎弥太郎らと学ぶ。剣術は大石神影流。安政5年、東洋の推挙で幡多郡奉行、万延元年、土佐藩大阪藩邸建設の普請奉行に、文久元年御近習目付に取り立てられるが、翌年、東洋が暗殺されると解任される。文久3年、江戸へ出て開成所で大鳥圭介に英語を学び、会津藩士より航海術を学ぶ。元治元年(1864)、岩崎弥太郎と提出した『開国策』が前藩主：山内容堂に認められ、藩政に復帰、大監察、参政となって公武合体の急先鋒となって活躍する。西洋科学振興の『開成社』を創設し総裁となる。慶応元年、叔父暗殺の武市瑞山を獄で処刑。慶応2年、藩命で薩摩、長崎に出張。岩崎弥太郎を藩の土佐商会の主任兼長崎留守居役に抜擢し、亀山社中の坂本龍馬を海援隊の隊長にするなど親交し、ジョン・万次郎を伴い上海を視察、船三隻を購入する。この間、薩土盟約を締結するが、イカロス事件で土佐藩の仕業と思っけて乗り込んできたハリー・パークスと論争に時間を取られているうちに、薩摩藩が討幕へ急転換し自然解消された。慶応3年、龍馬の「船中八策」に基づき、後藤は容堂と連署で、将軍慶喜に大政奉還建白書を提出し、大政奉還の実現に繋がる。その功で、150石の家禄が700石に、別に800石の役料を加えて1500石となる。更に維新後の賞典禄で1000石を与えられている。天皇に拝謁の為京都に向かったパークスが暴漢に襲撃された際、その命を救ってもある。

明治維新になると、大阪府知事(1868 - 70)、参与、左院議長を務めて、岩倉使節団を送り出している。明治6年、参議となるが、征韓論で西郷隆盛らに連座して下野した。

板垣らと愛国党を結成、民選議院設立建白書提出に行動を共にするが、明治7年には商社「蓬萊社」を創設して、55万円と投じて、政府より高島炭鉱を払い下げ実業に乗り出すが、経営はうまく行かず、二年後岩崎弥太郎に売却することになる。経営の才には恵まれなかったようだ。明治14年、自由党の結成に参画、副党首となる。翌年、井上馨の計らいで、板垣退助と共にヨーロッパに旅行した。その際、二人してレイビトンのカバンを買ったと言う。明治16年、福澤諭吉の依頼で、金玉均の支援に乗り出すも成功せず。明治20年、伯爵を綏爵。進歩党の結成に尽力し、絶えず大同団結運動を目指すが、常に政府側に取り込まれている。第二次逓信大臣、第九次農商務大臣を経験する。長女・早苗は岩崎弥之助の妻となっている。正二位勲一等旭日大綬章。

(2016・1・7 『幕末・維新風雲伝』 他)

6 江藤新平（えとう しんぺい） 1834 - 1874 佐賀 左院副議長



維新十傑 佐賀七賢人 教育・司法・警察制度の父 佐賀の乱で刑死

佐賀藩士・江藤胤光の長男として生まれる。手明鑓という最下級の武士の子だった。幼名：恒太郎、又蔵。諱：胤雄、胤風。号：南白。藩校・弘道館に学ぶ。教授・枝吉神陽が1850年に義祭同盟を発足すると、副島種臣、大木高任、大隈重信、島義勇らと参画し、尊皇思想の影響を受ける。安政3年（1856）『凶海策』草して、通商条約賛成論を展開する。（日本は島国。航海通商で国富兵強に徹し、イギリスを超えよう。蝦夷開拓。家格を超えた人材登用。仁政の政府）この基本は、終生一貫していた。

文久2年（1862）脱藩して京都に出て、桂小五郎を知り、姉小路公知の側近に食い込み、孝明天皇へ『密奏書』（幕府から外交権を接收し、漸次王政復古に及ぶべし）を献策する一方、佐賀へは大木を通じて『京都見聞』（朝廷、幕府、諸藩の動向）を送る。これが隠居の元藩主・鍋島閑叟に伝わり、以来、閑叟の隠密的役割を演じる。

王政復古の報に、藩主に東征軍に軍隊を送れと上申し実現。自らも随行して、木戸孝充の推薦で、東征大総督府の軍監に抜擢され、江戸開城に立ち会い幕府の書類を没収する。岩倉具視に東京遷都と東京・京都間の鉄道建設を提案。鎮将府会計局判事に任じられ、江戸の民政、会計、財政、都市問題を切り回す。戊辰戦争終了後、閑叟の命で佐賀に戻り、権大参事として、「民政仕組書」を起草し、身分の改革、住民自治、庄屋の公選、藩民皆教育、男女共学体制で藩政改革を断行。7ヶ月後の明治2年に、再び閑叟に江戸新政府に呼び戻され、太政官中弁（太政官に提出される書類の事前審査と太政官布告の起草）に任命される。同年虎の門で佐賀藩士に斬りつけられ重傷を負う。明治3年、制度取調専務を兼任、『建国策』15項目を立案する。①建国の体を明らかにし、②国家経綸の基本を定め、政府の歳入・歳出を明らかにし、国民に周知する。・・・⑮天下に中小学校を設置し大学に隷属させる。そして、民法編纂、憲法制定に着手する。民法は、民法会議を主宰し、ほぼ一年掛けて苦勞しながら「民法決議」79ヶ条に纏める。憲法は天皇、右大臣、参議ら臨席の上、月二回の国会会議を始めたが、大掛りすぎて段々全員の出席が難しくなり、先細った。明治4年7月、文部省を設立し文部大輔として、加藤弘之らを指揮し、国学者と漢学者で対立する教育問題を「西洋の丸写し」で行くと決めつけて、体制を整え、17日間で目途が立つと大木文部卿に譲って、自らは左院副議長として、議会制度の地ならしをする。明治5年、初代司法卿に就任し、裁判所に公聴自由と情報公開の基本と公文書の簡素化、司法権の行政からの独立、民の為の司直の原則を定める。明治6年の政変で下野し、翌年、佐賀の乱で斬首されるが、その貢献は極めて大きい。（2015・12・28 『明治維新と佐賀藩』一毛利俊彦）

7 副島種臣（そえじま たねおみ） 1828 - 1905 佐賀 外務卿



明治初年の『政体書』を起草。能書家・詩文にも優れる。

佐賀藩士・枝吉南濠（忠左衛門，30石）の次男として生まれる。父は藩校：弘道館の国学教授。兄は国学者・枝吉神陽。幼名：竜種。通称：次郎。号：蒼海、一々学人。

父と兄の影響もあって、早くから尊王思想に目覚める。嘉永3年（1850）兄・神陽の主宰する楠公義祭同盟に参加し、嘉永5年、京都に留学。漢学、国学などを学ぶ。この間、矢野玄道（1823 - 1887、老荘思想的国学者、『続皇国神仙記』など、著書多数、700巻）等と交わる。兄・神陽の命で、大原重徳に、將軍廃止と天皇政権による統一を建言した意見書を渡す。帰郷後、弘道館の国学教授となる。安政6年（1859）父が死去すると、佐賀藩の副島利忠の養子となる。1864年、長崎の佐賀藩英語学校「致遠館」でフルベッキに英語を学びながら、大隈重信と藩の英学生を監督する。慶応3年、大隈と共に脱藩し、徳川慶喜に大政奉還を進言しようとするが果せず。捕えられ謹慎処分となる。

慶応4年、新政府の参与・制度取調局判事となり、福岡孝悌と『政体書』の起草に携わる。政体書は、フルベッキから教わった、アメリカ大統領選を模範としたものと言われ、高官の4年毎公選規定があり、後に18名の議定の整理にその条項が使われる。

明治2年参議に任じられ、明治4年、外務卿となる。折からの、マリア・ルーズ号事件の折衝に当り、助けを求めた中国人奴隷を解放したことで、正義・人道の人との在日外交団の評価を得る。明治6年、前々年に台湾で起きた宮古島島民の遭難事件に対処のため、特命全権公使兼外務大臣として、北京に派遣され、日清修好条約批准に成功する。清の政府高官と交わした詩文・書が博学との評価を得たことと、マリア・ルーズ号事件の解決の功で、当時、欧米の外交団も皇帝に会うときは拝跪させられるのを、副島は初めて拝跪せず皇帝と対面した人物と評判をとる。帰国後、参議となるが直後に、征韓論争に破れて、西郷らと下野する羽目になる。明治7年、板垣退助らと民撰院設立建白書を提出するが、自由民権運動には加わらなかった。西南戦争中は、中国を外遊中であった。明治12年、宮内省一等待講。明治17年伯爵。明治20年宮内顧問官。明治21年枢密院顧問官。同24年枢密院副議長など歴任した。明治25年第一次松方内閣の内務大臣。勲一等を叙勲。詩文の他、蒼海の号で、能書家としても著名。空海以来の書賢との声も。その書は、自由奔放、独創的、絵画的で型にはまらない書体である。

（2015・12・30 『佐賀七賢人』 他）

8 大木喬任（おおき たかとう） 1832 - 1899 佐賀 文部卿



佐賀七賢人 民部・文部・教部・司法卿制覇 元老院・枢密院議長

佐賀藩士・大木知喬（45石）の長男として佐賀に生れる。通称：幡六、民平。藩校・弘道館に学ぶ。嘉永3年（1850）、副島種臣、島義勇らと共に枝吉神陽の義祭同盟の結成に参画する。後醍醐天皇の忠臣、楠木正成、正行親子を顕彰して祀る祭祀で、のちに佐賀藩の尊皇派の拠点となった。後から江藤新平、大隈重信らも参加し、佐賀の七賢人をなし、明治維新政府で活躍した佐賀人脈の一人となる。

慶應4年、江藤、大隈、副島と揃って、徴士となって明治新政府に出仕する。軍務官判事として、江藤新平と共に佐賀藩論として、『東西両都』の建白書を岩倉に提出。江戸を東京とし、東京・京都間を鉄道で結ぶ案で、木戸と大木に東京奠都の可能性調査を命ぜられ可能と報告、「江戸を東京とす」との詔書に繋がる。

明治元年、初代東京府知事・烏丸光徳の後を受けて、議政官参与兼務のまま、第二代東京府知事を務める。明治2年に民部省が発足すると、民部大輔として、戸籍法制定を行うが、その間、大蔵省の大隈重信と戸籍編成の主導権をめぐり対立する。明治3年には、初代松平慶永、2代伊達宗城を継ぎ、第3代民部卿となる。明治4年、文部省が発足すると、文部大輔・江藤新平が文部行政の基本を定めた後、左院副議長に転じると、大木は初代文部卿となって明治5年の学制制定を実現する。明治5年、教部卿を兼務し、教部大輔の福羽美静・穴戸璣を傘下に、神・仏・儒三教による国民教化を推進する。

明治6年の政変後、下野した江藤新平の後を受けて、参議兼第2代司法卿として、明治9年の神風連の乱、萩の乱を処理する一方で、民法編纂総裁として、仏人・ボアソナードを招聘して、「ボアソナード民法草案」（明治13年）、「ボアソナード刑法草案」（明治13年）や「治罪法」（明治16年）など刑事立法（旧刑法）などに漕ぎつけた。

第2代元老院議長（1880 - 1881）を経て、再度、第4代司法卿（1881—1883）、第7代文部卿（1883 - 1885）、第5代元老院議長（1885—1889）、第2代枢密院議長（1889—1891）、その間、第一次山県内閣、第一次松方内閣の斑例を務め、第4代文部大臣（1891—1892）、第4代枢密院議長（1892 - 1893）など、途切れることなく明治創業期の、明治新政府の要職を歴任した。勲一等旭日桐花大授章。明治17年の華族令施行に伴い、伯爵を授爵。終生の親友だった、江藤新平が明治6年の政変後、佐賀に向かうときに、士族の乱に引き込まれるから止めろと忠告したのも彼だった。芸妓との間の娘、昭和の俳人・岡崎えんは銀座「おかざき」の女将で、永井荷風、井伏鱒二、泉狂歌、堀口大学、久保田万太郎らに愛された。（2015・12・31 『佐賀七賢人』 他）

9 井上 馨 (いのうえ かおる) 1836 - 1915 山口 大蔵大輔



長州五傑 政財界で活躍 鹿鳴館の立役者

長州藩士・井上光亨（五郎三郎、大組、100石）の次男として生まれる。

幼名：勇吉。通称：聞多。諱：惟精（これきよ）。嘉永4年（1851）、兄の井上光遠（五郎三郎）と共に藩校・明倫館に入る。安政2年（1855）長州藩士・志道氏（大組・250石）の養嗣子となる。同年、藩主・毛利敬親の江戸参勤に従い、江戸で伊藤博文と出会う。江川英龍、斉藤弥九郎に師事し蘭学を学ぶ。万延元年の桜田門事変後、藩主の小姓となり「聞多」の名を賜う。藩主と国元に帰国、西洋軍事訓練を経験。文久2年、藩主の養嗣子・毛利定広（のち元徳）の小姓となり、江戸へ再下向する。藩命で横浜のジャーディン・マセソン商会から西洋船・壬戌丸を購入するが、その後、尊皇攘夷に共鳴して御楯組に入り、高杉晋作、久坂玄瑞、伊藤博文らとイギリス公使館焼き討ちに参画する。文久3年（1863）周布政之助を通して洋行を藩に嘆願して、伊藤博文、山尾庸三、井上勝、遠藤勤助（長州五傑）らとイギリスへ密航。留学中に国威の差を感じて開国論に転じる。1864年下関戦争の開戦を聞き、急遽、伊藤と共に帰国し、和平交渉にあたる。第一次長州征伐では武備恭順を主張、俗論党に斬りつけられて重傷を負うが、一命を取りとめる。高杉晋作の功山寺挙兵に加わる。その後、長崎グラバーから銃器などを購入などして、薩長同盟へつなげる。慶応3年の王政復古から、新政府の参与兼外国事務掛として、長崎の浦上四番崩れに関わる。明治元年長崎府判事、長崎製鉄所御用掛として、銃製造、鉄橋建設事業に携わる。明治2年大阪造幣局知事（造幣頭）に異動。長州騎兵隊騒動（明治2-3年）鎮圧に関わる。明治2年兄の死で、井上の家督を継承し、兄の次男を養子とす。維新後は、木戸の推薦で、大蔵省に入り、明治4年の廃藩置県の秘密会議に出席。大蔵大輔に昇進して、大久保利通大蔵卿が外遊中の大蔵省を取り仕切り、[今清盛]と言われるほど権勢を振るうが、留守中の明治6年、予算問題で文部卿の大木喬任や司法卿の江藤新平と対立して、尾去沢鉦山汚職問題を機に、渋沢栄一と辞職・下野する。以降、実業界で三井財閥の形成に携わる一方で、伊藤博文に請われて、官に戻り外務卿（1879 - 1885）、外務大臣（1885 - 1887）で日朝修好条約締結や鹿鳴館を背景に条約改正交渉を手掛け、農商務大臣（1889 - 1889）、内務大臣（1892 - 1894）、大蔵大臣（1898）など要職を歴任する。一度総理大臣の大命を受けたが、渋沢栄一の大蔵大臣起用に拘り、渋沢に断られて断念した。西園寺、松方正義らと元老として政財界に絶大な影響力を与えた。従一位大勲位菊花章頸飾。侯爵。

(2016・1・1)



現代日本に繋がる近代国家日本の原型を築いた元老

天保9年菘で、山県有稔(有利)の子として生まれる。足軽以下の最下層卒族の貧しい家であった。幼名：辰之助、18歳で小助と改名(のち小輔)、通称：狂介。五歳で母を亡くし、祖母に育てられる。父の影響で和歌を得意とし、槍術に励む。村田清風の藩政改革「家柄や資格を度外視した人材登用」の気運に乗り、吉田松陰の松下村塾に入門。槍の小助の運命が開けるのは、尊攘活動で伊藤利輔らと京へ派遣され、久坂玄瑞、梁川青巖、梅田雲浜らの志士に会い、天皇親政こそ国家の基本たるべしと教えられる。やがて、高杉晋作の奇兵隊に参加して頭角を顕し、明治・大正・昭和三代の軍事史、政治史に絶大な影響を与えて、近代日本を動かす人物になる。その成果に関しては、今も史家の間で毀誉褒貶が激しい。彼の転機は、明治2年、藩主・毛利敬親の命で、欧米視察の旅に出て、イギリスは立憲君主制の危機と見、パリコンミュンなど大衆の台頭の齎す政治的危うさを感じて帰国する。軍事意見書を提出。①常備軍と予備兵の必要性②沿岸防備の充実③ロジスティクスの整備を提案、征韓論には、傍観の立場をとる。最初、台湾出兵にも反対だったが、徴兵制度の推進に役立つと賛成に回る。明治10年の西南戦争では陸軍卿兼参軍として、作戦の最高責任者となって、敬愛する西郷と戦う。明治11年の大久保利通暗殺の後の近衛兵の反乱：竹橋事件で、55名の処刑、400名の処分をへて、「軍人訓誡」「軍人勅諭」参謀本部の設置と統帥権の独立など軍制の確立に辿りつく。こうして、軍事的リアリストとして、「陸軍の大御所」をバックに、政治の世界に登場し、内務相として、内務省にも堅固な派閥を形成し、徹底的に自由民権運動を弾圧する。憲法発布の時は、外遊していた。明治22年の第一次、31年の第二次山縣内閣で実施した様々な政策、例えば文官任用令の改正、治安維持法など、その影響は近代日本の全般に関わるものであった。結果、元老の一人として、伊藤博文と共に、世界に稀有の国家「大日本帝国」を創った。彼の理想は、一切の権威を天皇に帰せしめ、天皇を神格化し、その親政を絶対的なものとする天皇国家であったと言えよう。

『軍人勅諭』と『教育勅語』はその象徴であろうか。地方自治制度の確立にも努めたが、選出勢力、政党勢力の影響力の排除が目的で、国家優位、行政主導を図り、警察制度を整え、治安体制を築いて開発独裁体制の確立を図った。日本の漸進的民主化は、この山県との格闘を以て鍛えられとの見方もある。官僚主義、国民国家、国の安全など現在の日本を考える上で、格好の研究すべき人物であろう。(2015・12・17 『山県有朋』(半藤一利)、『山県有朋と明治国家』(井上寿一)など)

1 1 山尾庸三（やまお ようぞう） 1837 - 1917 山口 工部少輔



明治工学立国の父 初代法制局長官 日本聾啞協会初代総裁

留守政府の中心人物ではないが、この人物抜きでは明治の富国政策はもっと遅れていたに違いない。長州の庄屋：山尾忠治郎の次男として山口に生れる。幼名：富士太郎。7歳から寺小屋で読み書きを、更に、長州藩士より、歴史、漢詩、書を学ぶ。20歳、父の勧めで、江戸に遊学に出る。江戸の三大道場・練兵館（斉藤弥九郎）で塾頭の桂小五郎に武術を学びながら弟のように愛される。父からの学費は、大村益次郎が届けていた。傍ら、他の塾で洋式兵学を学ぶ。文久元年、亀田丸（船長が弥九郎の弟）に乗せて貰い、アムール河流域を視察。そのまま箱館で武田斐三郎（緒方洪庵、佐久間象山に洋学を学び、五稜郭の設計・建設者、初代陸軍幼年学校長）に師事する。文久2年、英国公使館焼き討ちに参加、伊藤博文と共に埴忠宝暗殺にも関わる。文久3年、藩命により陪臣から、士籍に列せられる。その後、伊藤ら長州五傑の一人として、英国への密航留学生に加わる。最初、ロンドンのユニバーシティ・カレッジで分析化学、土木工学を学ぶ。下関戦争勃発で伊藤、井上馨が帰国した後、薩摩英国留学生と交流し、とりわけ森有礼と親しくなる。彼らのカンパで旅費を作りグラスゴー造船所の見習工となる一方で、アンダーソン・カレッジで工学を学ぶ。（明治6年、工部寮＝工部大学校校長に招聘のヘンリー・ダイヤー同窓生）造船所で盲啞者が手話で仕事を熟しているのを見て、聾啞教育の必要性を痛感する。明治元年、井上勝と共に帰国。山口で、藩海軍局教授方助役として教えるが、明治3年、明治政府に出仕し、民部・大蔵省傘下の横須賀造船所の事務に携わるうちに、工部省設置の必要性を説いて実現し工部権大丞となる。明治4年工学の人材の必要性を説いて、東京大学工学部の前身・工部寮（工部大学校）を創設して、明治6年には、ダイヤー他、教授陣にお雇い外国人を招く。ダイヤーは明治15年まで校長を勤めて帰国した。この間、工部少輔、工部大輔から明治13年に、工部卿となつて、工学関連の重責を任されて、造船、鉄道、電話、灯台、鉱山や諸産業（ガラス、セメント）など国営で育成する一方、育った後は民営化に努めた。工部省が農商務省に吸収された時を機会に、参事院議官に転じ、参事院副議長、法制局初代長官（1885 - 1888、この時、霞ヶ関官庁街を整備）、同時に、宮中顧問官として、憲法制定を議する。明治31年には退官して、文墨に親しみ、金魚の飼育などに過ごした。明治8年に、盲啞学校設立意見書を出し、明治13年に楽善会訓盲院として実現。大正4年。日本聾啞協会総裁に就任している。子爵。勲一等桐花大授章。木戸幸一の外祖父にも当る。（21016・1・8 『山尾庸三の生涯』長州ファイブー山近善幸，他）

12 渋沢栄一（しぶさわ えいいち） 1840 - 1931 幕臣 大蔵大丞



農民の子から幕臣、そして500余の起業家へ 論語と算盤の人

これほど、成功した人も珍しい。しかも経済と道徳との合一を生涯貫いた。

武蔵野国血洗島（埼玉・深谷）の豪農・渋沢市郎右衛門元助の子に生れる。幼名：英二郎、のち栄一郎、篤太夫、篤太郎。号：青淵。父は読書好きで、養蚕や藍玉商、金融など営み、その手伝いで商売感を鍛える。7歳で、年長の従兄・尾高惇忠に四書五経、小学、日本外史、十八史略など漢学を学び、海保漁村塾や千葉道場で剣術も学ぶ。その従兄の影響で、尊皇攘夷論に心酔し、倒幕の為の高崎城乗っ取り計画を立てるが説得され中止、その挫折で向かった京都で、ひょんなことから一橋慶喜に仕官することになり、慶喜が将軍になると幕臣に転じる。慶応3年、慶喜の弟。徳川昭武のパリ万博への遣欧使節団の御勘定格陸軍付調役に抜擢され、欧州各地を歴訪し、見聞を広げること一年、合本法（資本主義）や官尊民卑でない社会に接している内、大政奉還の報に急遽帰国。慶喜に従い静岡へ移住したところ、新政府の要請で、民部省改正掛へ出仕。大蔵少丞、大蔵大丞を経て、大蔵省租税正などを任される。富岡製糸場設置主任。度量衡や国立銀行条例など制定に携わるが、明治6年、上司・井上馨の退官と共に、民業の実業界に転じ、以降、一貫して日本の資本主義（合本）による企業の育成に生涯を捧げる。

35歳、第一国立銀行創設を皮切りに、主に三井系の企業の起業に携わる。主なものに、王子製紙、日本鉄道会社、東京銀行、日本郵船、東京海上保険、足尾銅山、大阪紡績（東洋紡績）、東京瓦斯、東京電灯、日本煉瓦、東京水力電気、帝国ホテル、帝国劇場、札幌麦酒、清水建設、東宝など500余社の起業、育成に関与。さらに、養育院設立、東京養育院、中央慈善協会、盲人福祉協会など社会福祉施設。日本赤十字、聖路加国際病院、済生会、慈恵会など保険・医療施設。東京商業学校（一橋大学）、東京女学館、日本女子大など教育機関。東京商法会議所会頭、東京株式取引所の設立に寄与する。

日仏協会、日露協会、在米日本人会など国際団体を含めると600を超える社会公共の活動に関与・支援をした。69歳を機会に、多くの企業の役員を辞任し、訪米実業団を結成し渡米したり、グラント米大統領来日時に歓迎会を企画、関東大震災には復興委員長を務めるなど、その活躍は多方面で、枚挙に遑はない。『徳川慶喜伝』も刊行して、恩に報いている。現在、渋沢栄一が再び、脚光を浴びているのは、経済道徳合一主義を生涯貫き、「論語と算盤」を一致させた経営方針が評価されているためだろうか。

訓誡の「金は、よく集め、よく散ぜよ（金は尊ぶべくまた卑しむべし）」の精神が、現代の多くの企業に薄れていることへの反映だと思われる。

（2016・1・2 『渋沢栄一』渋沢財団編、『論語と算盤』）

13 黒田清隆（くろだ きよたか） 1840 - 1900 鹿児島 開拓使次官



北海道開拓に貢献 使節団女子留学生派遣の発起人 首相、元老

大久保利通が暗殺された後の薩摩閥の中心となり元老も務めるが、妻殺害を噂されるなど酒乱でとかく話題となる。北海道の開拓には絶大な貢献をなす。薩摩男児。

薩摩藩士・黒田仲左衛門清行（4石）の長男として生れる。通称：仲太郎。了介。

長じて砲手となり、生麦事件の時も随行している。文久3年の薩英戦争にも参加。江戸に出て砲術を学び皆伝となる。慶応2年、薩長同盟に際しては、西郷吉之助と桂小五郎の対面の実現に紐帯役を務める。鳥羽伏見の戦いでは薩摩藩小銃第一隊長、戊辰戦争では北陸各地を転戦し、米沢藩、庄内藩などを帰順させることに腐心する。一旦、鹿児島へ戻るが、明治2年軍務官そして出仕し、箱館戦争では清水谷公考中将の参謀として総指揮をとり、榎本武揚に降伏を勧める。投降・入牢中の榎本の助命運動の為、坊主となって西郷隆盛に釈放を迫ったことはあまりにも有名。後に榎本を特命全権公使に推薦して、明治7年の樺太・千島交換条約締結につなげる。この関係は、終生続き、娘を榎本の息子に嫁がせ、黒田の葬儀委員長を榎本が務めることになる。

明治3年、樺太専任開拓次官となり、樺太を視察し、ロシア官吏とも接触し、樺太は3年ももたないので、北海道開拓に重点を移すように建言する。岩倉使節団派遣の直前の明治4年1月―5月、米国と欧州を視察旅行し、米国の農務長官・ホールズ・ケプロン（1804 - 1885）をスカウトして、開拓使お雇い教師頭取兼開拓顧問として招致。その後のクラーク博士など多数の御雇外国人招聘の道を開くと共に、女性教育の必要性を痛感し、女子留学生派遣を開拓使予算の中から拠出することを提案して実現する。

明治4年10月東久世通禧が天皇侍従長に転じ、岩倉使節団に宮内庁理事官として参加の為、長官を辞任すると、黒田は開拓使事業を総覧し、その後の北海道の発展の基礎を築くことになる。明治6年の征韓論には組みせず、明治7年の台湾出兵にも反対したが、明治10年の西南戦争では、征討参謀として、熊本城の開圉の功を挙げる。

また明治9年、江華島事件交渉の全権弁務大臣として、日朝修好条規を締結する。明治11年、大久保利通が暗殺されると、薩摩藩の重鎮として元老まで登りつめる。

北海道開拓使官有物払下げ事件で、ミソを付けたものの、明治20年、第一次伊藤内閣の農商務大臣、伊藤博文が枢密院議長で首相辞任すると、明治21年、第二代内閣総理大臣として、大日本帝国憲法発布を行う。大隈外務大臣の条約改正交渉に起因する傷害事件で短期政権となるが、その後も、枢密顧問官、逓信大臣、枢密院議長など歴任した。従一位大勲菊花大授章。伯爵。（2016・1・3）

14 榎本武揚（えのもと たけあき） 1836 - 1908 幕臣 入獄中



蝦夷共和国総裁 最後の幕臣・新政府要人となる

幕臣・御徒目付：榎本武規（箱田良助）の次男として下谷御徒町に生まれる。生粋の江戸っ子。父は天文学・暦学に通じ、榎本家に養子入りした。通称：釜次郎。号：梁川。

田辺石庵に儒学を学び、昌平坂学問所に入学。安政元年、函館奉行の随行で、蝦夷地、樺太を視察する。第二次長崎海軍伝習所に派遣され、カッテンディーケやポンペに機械学、科学を学ぶ。終了後の安政5年、築地軍艦操練所教授となる。一方、ジョン万次郎私塾で英語を学び、大鳥圭介と知り合う。幕府がオランダに開陽丸を発注したのに際し、オランダ留学生として派遣され、海軍大臣になっていたカッテンディーケ、ポンペの世話になり、観戦武官として、欧州での戦争観戦の機会を得る。ハーグで船舶運用術、砲術、蒸気機関学、化学と国際法を学ぶ。慶応2-3年開陽丸を日本回航して、帰国後、軍艦頭となり、鳥羽伏見の戦いの時、大阪城へ行くと入れ替わりに徳川慶喜が、開陽丸で江戸に逃げ帰ってしまう。大阪城内の18万両を運んで、富士山丸で江戸に戻ると、海軍副総裁に任じられる。軍艦の内、4隻（富士山丸、朝暘丸、翔鶴丸、観光丸）は勝海舟の命で、新政府に渡し、残り8隻と2000人の旧幕府軍を率いて、戊辰戦争の各地を回り、最後に、檄文（新政府は、真正の王政に非ず。皇国のために一和の基業を開かん）を残して、3000人の残兵、土方歳三、大鳥圭介、桑名藩主・松平定敬らと共に、蝦夷に向かう。開拓願いの嘆願書を何回か出したが許可されず、占領した蝦夷地で、公正な選挙による蝦夷共和国を樹立し、初代総裁に選ばれる（1869・1・27-6・27）。各国公使館にはその旨通知する。五稜郭に籠って政府軍と戦うが、主力軍艦・開陽丸が荒波で沈没し次第に劣勢となり、敵将・黒田清隆の降伏勧告に応じて、自決しようとしたが、大塚彦之丞に止められた。降伏の際、黒田に『海律全書』（Diplomatie De La Mer-）を贈った。東京で二年半入牢するが、黒田清隆が、丸坊主となって助命嘆願し、西郷隆盛が認めて、明治5年、北海道開拓使次官として採用され北海道資源調査などに従事する。その後は、黒田の引きもあり、とんとん拍子で新政府の要職：外務大輔、外務卿(第三代)、駐露特命全権公使（樺太・千島交換条約締結）、駐清特命全権公使などを歴任する。内閣制度発足後は、初代逓信大臣、第二次文部大臣、第七次外務大臣、第10代農商務大臣（官営八幡製鉄所設立、足尾鉍毒事件）、枢密顧問官、内国勸業博物館副総裁等々。正二位勲一等旭日菊花大授章・子爵を授爵する。福澤諭吉に『瘦せ我慢の記』で、幕臣としての別の生き方がなかったかと揶揄されたのは有名な話。

（2016・1・5 NHK『最後の幕臣—蝦夷共和国』他）

15 フルベッキ (Guido Herman Fridolin Verbeck) 1830 - 1898 大学南校教頭



岩倉使節団を企画した宣教師

掲題のフルベッキ写真(致遠館の生徒たち)で有名だが、岩倉使節団派遣の原点であるブリーフ・スケッチを作成したことから、この明治新政府の回覧大旅行が始まった。

フルベッキは、オランダの裕福なプロテスタント(モラヴィア派)の子として、1830年に生れた。オランダ語、英語、ドイツ語、フランス語を学んだあと、ユトレヒト工業大学に進学する。1852年妹夫妻の招きで、アメリカに移住。職業を転々とするが、聖職者をめざし、1855年オーバン神学校(NY)に入学する。そこで、サミュエル・ロビンソン・ブラウンと知り合い、神学校卒業後、日本派遣宣教師に選ばれ、1859年ブラウン、シモンズと共に、上海経由妻マリア・マンヨンと来日する。フルベッキは長崎で英学校を開く。そこで教えたのが佐賀藩の大隈重信や副島種臣であった。1864年、幕府の長崎英語伝習所(済美館)のお雇い外国人教師として、英語を教える。何礼之、大山巖、相良知安、本野盛享らも学んだ。何礼之は私塾を開き、門下生に前島密、陸奥宗光、高峰讓吉、安保清康、山口尚芳、芳川顕正らがいる。孫弟子である。慶応3年、佐賀藩の長崎『致遠館』で、英語、政治、経済を講義した。明治元年には、岩倉具視の息子、具定、具経も学んでいる。同年、日本近代化の為の「ブリーフ・スケッチ」を書いて、大隈重信に渡す。これが、のちに岩倉具視の目に留まって使節団派遣の契機となる。

明治2年、新政府に招かれて、幕府の開成所から開成学校・大学南校となった東京大学の前身に教頭として勤め、大学規則や教育内容の充実に努める。1872年に福井藩にいたウィリアム・エリオット・グリフィスを化学の教授に招いている。ドイツ医学の採用を進言したのも、彼と言われている。1871年に発足した文部省は、1873年米国ラトガース大学からダビッド・モルレーを文部省顧問に招聘する。モルレーは、畠山義成、勝小鹿、岩倉具定などを教えたことがあり、その後、1878年まで、文部省顧問を務める。フルベッキは、1873年より左院の翻訳顧問に、1875-77年には元老院翻訳顧問を勤めて、一貫して、新政府のブレーンとして活躍するが、明治10年に官職を退き、東京一致神学校や華族学校(学習院)の講師を勤める。1878-79年一旦アメリカに帰国するが、再来日して、日本各地を伝道に歩くほか、文語訳聖書・詩篇を翻訳(1878)、宣教師会議(大阪)で「日本のプロテスタント布教の歴史」を講演したり、明治19年には明治学院創設に関わり、理事・神学校教授となり、旧約聖書を講じ、1888年には、明治学院理事長になった。(ヘボンが初代総理)1898年日本で逝去して青山墓地に埋葬されている。(2016・1・9)